



企画展 只見の外来生物

その生態と影響





企画展にあたって

外来生物により変わってしまった風景

左上) 河川堤防に広がるお花畑（オオキンケイギクとテンニンギク）、右上) セイタカアワダチソウが残る秋の田園風景、左下) 六十里越の道沿いのセイヨウタンポポ、右下) ただみ・ブナと川のミュージアム近くを横切るハクビシン

外来生物は、人間活動に伴って侵入、分布域を拡大し、在来生物の生育、生息を脅かします。只見町は奥山に位置するため、人の行き来が制限され、また、外来生物を導入し、あるいは、その侵入拡大を促進するような大規模な開発行為や産業活動が行われてきませんでした。そのため、現在のところ、定着している外来生物の種類、個体数は、他地域と比べ共に少なく、その影響も小さく地域固有の生物相が保全されています。

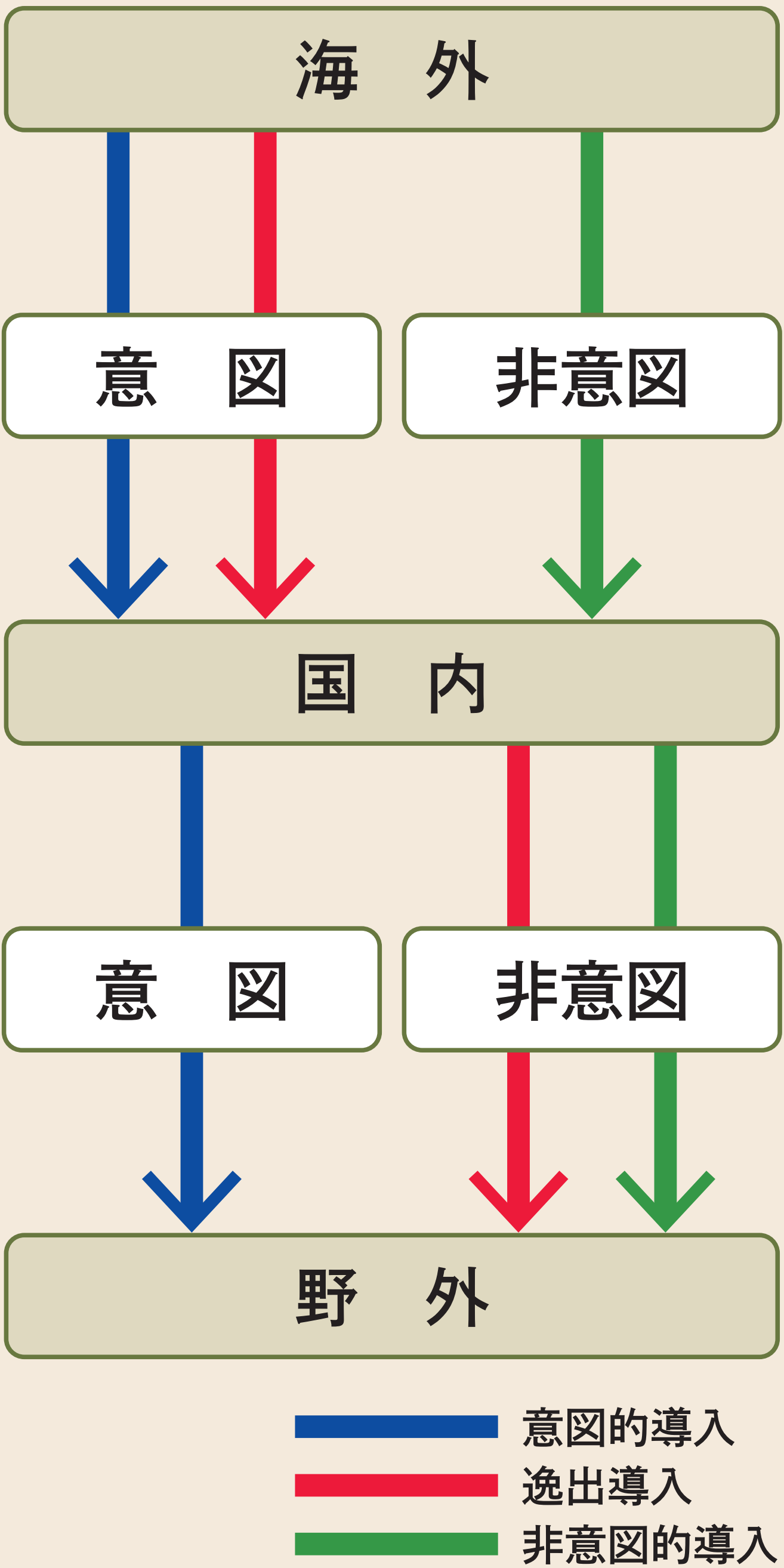
只見町は平地でも積雪が3mに及ぶほどの多雪環境にあり、これにより急峻で複雑な山岳地形が形成されています。その複雑な地形にはそれぞれの立地環境に対応してブナ林をはじめとした冷温帯落葉樹林や低木林などの多様な植生が成立し、それらが自然度の高いまま広範囲に残されています。さらに、そうした環境は多様な動物相の生息を可能にしています。この多様で固有の自然環境と生物相は、地域住民の生活基盤であり、守るべきものとなっています。

近年、道路状況が改善されて物流が拡大するのにもともなって、只見町にも少しずつ外来生物が侵入、拡大し、その影響が増しつつあります。今、只見町固有の生物相を守るために、そして、地域住民の生活を守るために、外来生物についての正しい理解と分布拡大を防止する行動が求められています。この企画展では、外来生物を理解するために必要な生態の情報と只見町の外来生物の現状及び影響を紹介し、それに対する対策を提案します。企画展を通して、外来生物を防ぐために私たちにできることを考えていただき、只見町本来の自然環境や野生動植物の大切さを理解していただければ幸いです。

外来生物とは何か？

“外来生物（外来種ともいう）”は、人間活動によって、日本国外から本来は分布していなかった日本国内に持ち込まれた生物種のことを言います。「持ち込まれた」と言っても、人間が目的を持って持ち込む場合もありますが、人間が運んだ荷物や人間自身に偶然に付着して持ち込まれる場合もあります。持ち込まれた生物は、屋内で管理されている分には問題を生じませんが、自然界に出てしまう場合があります。目的を持って持ち込んだ生物をさらに人が野外に放つ場合を“**意図的導入**”、目的を持って持ち込み飼育管理していたが生物自ら野外に逃げ出してしまった場合を“**逸出導入**”と言います。一方、人が意図せずに持ちこみ、なおかつ野外に放出してしまった場合を“**非意図的導入**”と言います。野外に出た生物の多くは、通常、その個体限りで死滅しますが、一部の生物は自然界で自らの力で繁殖し子孫を残し増えていきます。これを**定着**あるいは**帰化**と呼んでいます。

外来生物に対して、もともとその地域に生息、分布する生物を**在来生物**（あるいは**在来種**）と言います。外来生物を表す言葉には、ほかに**帰化種**、**移入種**、**侵入種**などがありますが、その使い分けについては厳密な定義はありません。ただし、移入種・侵入種は、生物自身の力で生息域、生育場所、分布域を広げた場合にのみ用いられます。



意図的導入と逸出導入、非意図的導入の違い

外来生物の導入経路を知ることは、その対策をすすめるために重要



オオバコ

在来生物



ヘラオオバコ

外来生物



オドリコソウ



ヒメオドリコソウ

日本の在来生物とそれに対応する外来生物

外来生物はどのようにして持ち込まれたのか？ —— その由来と経路

意図的導入種

目的をもって導入された外来生物のことで、食料や木材、牧草などの生産、緑化などの環境整備、ペットや鑑賞用生物、狩猟や釣りといった娯楽など導入目的は様々です。代表的なものとして、植物ではイタチハギ、動物ではフイリマンゲースが挙げられます。イタチハギは、砂防・緑化を目的で導入されたもので、只見町でも法面^{のりめん}などでよく目にします。フイリマンゲースは、ハブやノネズミ類を駆除する目的で南アジアから持ち込まれ、沖縄本島や奄美大島で放獣されました。この例では、ハブ退治に効果は無く、逆に家禽や希少な地域固有種を捕食し問題となっています。

逸出導入種

食料生産や動物園・植物園での展示、愛玩や鑑賞を目的として、管理を前提に飼養^{しやう}されていたものが不注意で逃げ出し、生態系に深刻な被害をもたらしている外来生物を言います。代表的なものとして、植物ではオオカナダモ、動物ではアメリカミンクが挙げられます。オオカナダモは、実験用あるいは金魚鉢の水草として導入されたものが、本州、四国、九州と広く野生化しています。アメリカミンクは毛皮を採取するために養殖目的で持ち込まれたものが逃げ出し、北海道、宮城、福島、群馬、長野で野生化し、家禽や在来の小動物を捕食することで問題となっています。

非意図的導入種

輸入穀物や栽培種子、種苗^{しゅびょう}魚類、輸入土砂、輸入木材への混入や、飛行機や船舶、旅行者の荷物に紛れて、意図せず持ち込まれた外来生物です。代表的なものとして、ハルザキヤマガラシやマツノザイセンチュウが挙げられます。ハルザキヤマガラシは、ムギ類に混入して導入されたと考えられ、亜高山帯や河川敷といった希少種の多い環境にも定着しているため在来植物との競合が懸念されています。マツノザイノセンチュウは、北アメリカが原産で、輸入木材に付着して持ち込まれたと考えられています。マツを枯らすことが問題で、北海道を除く全国に広がり、各地で壊滅的なマツ枯れ被害を引き起こしました。



イタチハギ



フイリマンゲース（環境省HPより）



オオカナダモ



アメリカミンク（環境省HPより）



ハルザキヤマガラシ



マツノザイセンチュウによる松枯れ

外来生物が分布拡大する背景

定着し、分布拡大している外来生物に共通する特徴は、まず、繁殖力が旺盛という点です。すなわち、子（種子あるいは卵）を大量に生産する、成長が早い、繁殖期が長いということです。さらに、植物であれば栄養繁殖する、送粉や種子散布で有利な形質を持つといった特徴があります。また、動物では、雑食性、汚い環境でも生息できる、狭い空間で暮らせるなどの柔軟な生態を持っています。

さらに、これら生物側の特徴に加えて、人間側の活動も外来生物の定着、拡大に大きく影響します。すなわち、繁殖可能な個体数が持ち込まれること、何度も持ち込まれること、生育・生息に適した環境が作られることです。生育・生息に適した環境とは、外来生物と競合する種や捕食者が少なく、生育可能な資源（養分、空間、食物など）が存在する環境です。そして、そうした環境を人間自らが作っているという状況があります。例えば、植物であれば、放置された水田・畑地、道路際、空き地、埋立地といった人為によって攪乱^{かくらん}された環境です。在来植物が取り除かれ、裸地化し貧栄養であることから、外来植物にとっては好適な環境です。外来植物は、在来生物がいないこの隙間に入りこむことに成功します。動物でも同様に、水際に生息する半水棲の哺乳類ヌートリアは、都市化による環境悪化が、本来の野生動物の生息場所を奪い、その空いた空間に入り込むことで定着に成功したと考えられます。



多量の種子を生産するエゾノギンギン



栄養繁殖するセイタカアワダチソウの地下茎



人為的な攪乱環境に群生するハルシャギク



空いた空間に定着したヌートリア